

KSK 川崎市障害者社会参加 推進センター通信

編集人 川崎市障害者社会参加推進センター
所長 関山 進
編集責任者 広報・啓発委員会
委員長 伊藤 實
〒210-0834 川崎市大島 1-8-6
川崎市南部身体障害者福祉会館内
電話 044-246-6941
FAX 044-246-6943
E mail zksk@nifty.com
<http://kawashinkyo.org>

令和 6 年度障害者作品展 開催



障害のある方々が日頃創作されている作品の発表の場として、12月18日(水)から22日(日)までの5日間、アートガーデンかわさき第1・第2展示室にて、令和6年度川崎市障害者作品展を開催しました。会場には、市内に在住等をされている障害当事者の方よりご出展いただいた絵画101点、手工芸22点、写真6点、書5点、文芸2点の計136点を展示しました。観覧者の皆様には、自由な色使い・多様な技法で創作された作品が、障害について理解を深めるきっかけになったのではないのでしょうか。

また、21日(土)、22日(日)にはワークシ

ョップ「小さな木のおもちゃに色を塗ろう」、「3色パステルアート体験」を実施しました。おひとりで参加し、黙々と体験に没頭される方や、ご家族でお話しをしながら体験される方など、多くの方々に楽しんでいただくことができました。

開催にあたり、ボランティアにご参加いただいた市立川崎高等学校福祉科の皆様をはじめ、作品展の開催に向けてご尽力をいただいた作品展実行委員の皆様、ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。今後もより多くの方に障害者作品展を知っていただけるよう、取り組んでいきたいと思ひます。

作品展を終えて

令和 6 年度障害者作品展の期間中、体調を崩され入院されていた実行委員長の府録讓治ふるくじょうじ氏のご逝去されました。委員長は、ご自身の作品出展を含め、障害児者の作品展示にご尽力されてこられたことに感謝を申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

令和 6 年度も関係機関のご協力により例年通り多くの出展があり、また好評のワークショップも開催することができました。

しかし出展者の年齢構成を見ると、若い方の応募が少なかったため、大型の作品や視線入力を用いた作品を目にする機会がありませんでした。開催方式を実行委員会方式に改めアートガーデンかわさきで作品を展示するようになった当初は、構成団体が熱く、また共催団体・作品募集の周知方法・作品展の周知等に熱心に討議し、作品搬入時・展示の作業も実行委員等が関わっていたが回を重ねるにつれ、慣れてくると事務局に任せることが多くなってきている。高校生のボランティアとしての参加はこれからも是非続け、水平展開できれば、共生社会への啓発事業になると思います。国は、障害者の文化・芸術の推進に力を入れ、予算もつけていることからさらに発展させることができると思う。

本作品展が故府録氏の思いを大切にし、障害児者にとって魅力ある場となるように増々工夫をする必要があるのではなからうか。

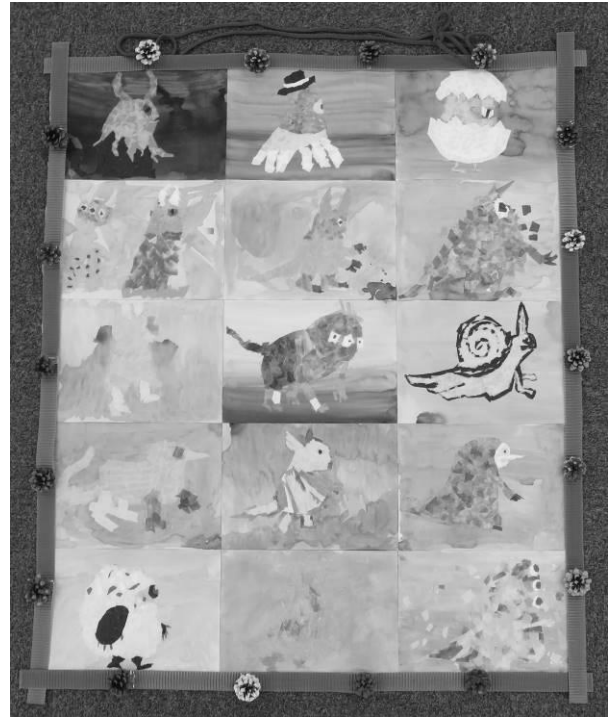
令和 6 年度障害者作品展実行委員会

副委員長 石橋 吉章いしばし よしあき

(川崎市肢体不自由児者父母の会連合会)



出展者より



(出展作品: マスキングテープアート「かいぶつ園」)

西生田中学校よりこの障害者作品展に出展させていただいたのは、今回で 2 回目です。以前募集のポスターに市内中学校のマスキングテープアート作品を見つけ、その精密さと美しさに本校でも取り組んでみたいと美術科の先生に相談し、挑戦することとなりました。

子どもたちの障害は多様ですので、一作品目にはスイミーの世界の海の生き物。今回は怪物園の怪獣たちとわかりやすく、そして『違う』ことが楽しめる作品を計画してくださいました。

授業中は、一人で黙々と取り組んでいる子、先生と一対一で取り組む子、先にたくさんのテープを机の周りに張り付けてから始める子、一つの作品をあっという間に仕上げ一人でも何枚も作り上げた子などなど、取り組み方も千差万別でした。そして、取り組みが一番時間がかかった子が仕上げた頃には、出品した作品の何倍にもなるようなたくさんの怪獣が生き生きと行進していました。

今回の作品制作にあたり中心となって計

画してくださった美術科の先生の「違いを楽しめる作品への思い」を以下にご紹介いたします。読者の皆様には、それぞれの感性でマスキングテープアートを楽しんでいただけたらと思います。

(川崎市立西生田中学校 特別支援学級主任
川原 育子)

本校でのマスキングアートは絵本のオマージュをテーマに制作をしています。今回の作品は『怪物園』からそれぞれ好きな怪獣を選び、感性を働かせながら、自分なりの色彩や模様をマスキングテープで貼りながら表現しています。材料のマスキングテープは、単色のものを中心にグラデーションになっているものも含めて何色も用意しました。その中から 3 色選んで組み合わせながら、思い思いに貼っていきました。小さくちぎったものを机などに貼り用意しておく、ちぎるのが苦手な生徒でも、スムーズに制作を進めることができました。台紙は水彩絵の具で塗り、繊細なにじみなども生かしながら絵本の世界観が伝わるようにしました。一人ずつの分担を決めて取り組むことによって、完成まで責任を持ち制作することができました。最後に作品を一つに繋げ結集させることによってユニークな怪獣たちの行進を表現しました。

(同校 美術科教諭 ^{やなぎはら あさこ} 柳原 麻子)

ワークショップ 3色パステルアート

令和 6 年 12 月 22 日(日)に障害者作品展内で 3 色パステルアートのワークショップを開催させて頂きました。様々な方々にご参加頂き大変有り難うございます。

3 色パステルアートとは、シンプルであるが故に幅広く、かつ奥深いアートです。アートと言っても難しいことは無く、上手いも下手ありません。苦手な人ほど固定概念に捉

われないため、素敵な作品に仕上がります。

最大の特徴は、「なぜ 3 色だけなのか？」限られた色の中で自分らしさを最大限に表現できます。例えば葉や草などの緑を、数多の色がある画材ならばその中から近い緑を選びます。しかし、3 色しかないのだから色は自分で作るしかありません。その不自由であるが故に作者の閃きと創造性が生まれます。



(ワークショップに参加頂いた方の作品)

もう一つの特徴は、固定概念に捉われないことです。今回のワークショップで、ある参加者が空を赤で塗っていると、他の方から「違うよ、空は青色でしょう」という声が上がりました。私は「大丈夫ですよ。その赤色で素敵な作品になりますから」と伝えました。完成した作品はとても素敵な赤い空の風景となりました。

このように、3 色パステルアートには正解が一つではありません。老若男女、初心者、経験者、障害の有無に関わらず、誰もがアートに触れることができます。(筆者も 3 色パステルアート以外では絵が描けません)

私は、アートはもっと身近で気軽なものだと思っています。決して一部の人だけのものではないのです。今回のワークショップを通じて、「エイッ！描いちゃえ！」と思って頂けたら幸いに思います。

(3 色パステルアートインストラクター

^{いとう はじめ} 伊藤 一)

ボランティアのみなさんの感想
(川崎市立川崎高等学校)

ボランティアに参加する前は、障害のある方の作品は個性的な絵や一生懸命さが伝わる作品をイメージしていました。しかし実際には、とても細かい切り絵やイラスト、面白いアイデアに溢れた完成度の高い作品で、一人のアーティストとして多くの人に知ってもらいたいと思うほど素敵な作品がたくさんありました。「障害」と聞くと支援が必要な面に注目しがちですが、表現力や心の豊かさに障害の有無は全く関係ないことを実感し、自分の中に無意識の偏見があったことに気づきました。今後は支援者として、個々の表現力や感性を最大限に活かせるような環境を整えられるように関わっていきたいと思います。

(福祉科 3 年 木村 ゆめ叶さん)

3 年間ボランティアに参加させていただいて、障害者作品展はとても素敵な場所だと感じました。出展されている作品は色使いなどが作者さんならではの視点で描かれていて、私の中で新たな感性が生まれたと感じています。また、作品を見に来る方の中には作者さんのご家族や、施設の職員の方、市民の方など様々な方がいらっしゃいました。このように多くの方に作品を見ていただける機会は作者さんにとって大切なことなのではないかと思いました。加えて、来場者にとっても作者さんが輝いているところを見ることで、私のように心を揺さぶられる方がいると思います。実際にボランティアで関わらせていただいて、障害者作品展は関わる方々を幸せにすることができる場所だと思いました。

(福祉科 3 年 新倉 一紗さん)

私は障害者作品展を通じて、以前より障害に対する理解を深められたと思います。絵画、写真、書、文芸、手工芸など、たくさんの作品があり、それぞれ異なる視覚的・感情的な

印象を持つことができました。障害があるということが障壁となることなく、作品一つひとつにその人の個性や思いが込められていると感じました。また、障害者の方々が表現の場を持ち、作品を見て楽しむ機会があることの大切さを感じました。アートは誰もが楽しめるものであり、障害の有無に関係なく表現の場が開かれていることが、より包摂的な社会を作る第一歩だと思います。障害者の方々が持つ可能性や才能に触れることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

(福祉科 3 年 島津 侃実さん)

障害者作品展のボランティアに参加して、知的障害者(発達障害を含む)や精神障害者、身体障害者などの方でも人それぞれさまざまな能力があり、今回の展示されている作品を見て、レベルがものすごく高く、見ていて感銘を受けました。また、今回のボランティア活動を通して、障害を持たれる方々の活動についてこれまで以上に興味を持つようになり、これからの障害者施設実習で利用者さんへの理解を深めるとともに積極的にコミュニケーションも取ることを意識して励んでいきたいと感じました。

(福祉科 2 年 寺崎 萌衣さん)

今回のボランティアでは展示のお手伝いだけでなく、作者の方とも交流することができ、どのような思いで作品を作っているのかを聴くことができ、貴重な機会でした。実際に作品の思いや作り方について丁寧に説明してくださる方もいて、作品に対する熱い思いを感じることができました。それぞれの作品に個性が現れていて、どの作品も素晴らしくボランティアを通じて実際に見ることができて良かったと感じました。自分の努力や才能を最大限に活用して作品を作っているのだと感じました。

(福祉科 2 年 仲村 麻音さん)

「心の医者フィールド・ノート」（精神科医 中沢正夫著 ちくま文庫）の感想

本の帯には「精神病院に秘密の体験入院した医学生がみたものは……そして彼が選んだ道は？」『怖い』『身につまされる』、21 年前の文庫が SNS で突如大反響、緊急復刊！とありました。これだけ見ると当時の精神病院での恐ろしい話かと思いますが、秘密入院話はエピソードの一つで、全体は著者が地域で出会ってきた 30 人以上の患者とその家族、保健婦（当時）などの「人」のドラマが感動的に描かれています。患者にどのような治療を行ったのか、家族は患者とどう接したらよいかなどの具体的な話が出てくるわけではないのですが、人間らしい患者の変化、家族の苦闘と変化が読み取れ、なぜだか暖かさにつつまれ優しい気持ちにさせてくれました。

地域での患者さんや家族のドラマは、みなさんに是非読んでいただきたいと思いますが、著者が精神科医としての悩みや喜びについて述べているところは、精神疾患の当事者を抱える家族として心を動かされました。

「精神科医は（患者の）悩みを共有しながら、時間が流れるのに耐えている。その人の激情が噴出し終わると、必ず再び大地を踏みしめて歩き出すことを頭から信じて、時の過ぎるのを待つのである。待つことは患者と同じく医者にとってもつらいことである。本当に黙り続けているかというところでもない。その患者の視野狭窄が逸れはじめた頃、言葉少ない助言はする。しかし、歩くのも、歩む方向を決めるのも原則的には患者である」

患者を人として接し、変化・成長するものと考え、焦らず、家庭環境、生活環境を含めて丸ごと「聴く」と「待つ」ということ。成功や失敗に一喜一憂しないで、この姿勢を持ち続けることが、家族にとっても簡単ではありませんが大切だとかみしめました。

著者の中沢正夫医師は、「1937 年生まれ、群馬大学医学部卒業、統合失調症治療の権威

として、また、地域・家族ぐるみの精神衛生活動の先駆者としても知られる」と経歴が紹介されています。また、この本で描かれた時代は、「昭和 40 年、大学に戻った私は、ある保健所管内を対象に始まろうとしていた地域精神衛生活動に迷うことなく参加した。人口 10 万ほどの地区を 5 人の精神科医が担当し、訪問活動、出張診療を行ない、地域で患者を支える組織づくりに取り組んだ。リーダーは、故江熊要一助教授であった。「なるべく入院させないで「心の病」を治そう」というのが基本理念だった。週 2 回、患者さんの家庭を訪れ、相談にのった。相手が家にいないときは、畑や田んぼへ、勤め先の工場へと足を運んだ。持ちかけられる相談は、就職や結婚、進学、医療費……など、人生相談そのものだった」と述べられています。

この取り組みは、昭和 33（1958）年から群馬大学医学部から始まった「生活臨床」という取り組みだと読後にわかりました。当時の精神科医療は、閉鎖的な入院治療が中心で、統合失調症の患者を外来で診ることが冒険と言われた時代です。60 年以上も前に、患者を可能な限り入院させず地域生活の中で治療し、地域で普通の暮らしを目指した取り組みが生き生きと実践されていたことを知り新鮮でした。

いま、制度も変わり「入院から地域へ」という大方針が打ち出され、社会資源も整いつつあります。それだけに、患者さんが地域の中で普通の生活ができるようになるには、患者さんに寄り添い、生活を丸ごと支える生活臨床の取り組みの核心を、今日的にどう活かすのかが問われていると痛感しました。

(NPO 法人川崎市精神保健福祉家族会連合会
あやめ会理事長・精神保健福祉士

おさかべ けんいち
長加部 賢一)

40 年の軌跡：車いすから見た社会の変化と変わらぬ課題（最終回）

これまで 2 回にわたり、頸髄損傷により四肢麻痺の障害を持つ北島総美さんの歩みをお伝えしてきました。18 歳で被った事故から 40 年、北島さんは多くの人々との出会いに支えられながら、さまざまな活動に取り組んでこられました。最終回となる今回は、北島さんが考える共生社会への道筋と、そのために私たちにできることについて考えます。

◆支え合いから生まれる力

北島さんの 40 年の歩みを支えてきたのは、家族や周囲の人々の存在でした。

「交通事故がきっかけで障害を負い、車いすが自分の足代わりとなることにショックを受けたのは確かです。でも、私の家族は放任的というか、『やりたいことをやりなさい』という感じでした。家族は私をどんどん外に連れて行ってくれましたが、ジロジロ見られることは家族の方が私より辛かったんだろうと思います。だけど、そんな家族のお陰で私は強い意思を持つことができ、色々な困難も乗り越えることができました」



（ご家族に囲まれた笑顔あふれる選暦パーティー
中央が北島さん）

そして、周囲の人々のサポートの重要性を強調します。

「家族はもちろんのこと、『手作り工房ウィンドウ』を立ち上げるときや現在もそうですが、とても良い人たちに巡り会えました。私の障害や思いを理解した上で手助けしてくださる、という事がとても大きな支えになっています」

◆当事者の会がつなぐもの

現在、北島さんは全国脊髄損傷者連合会神奈川県支部川崎協会の会員として積極的に活動しています。毎年さまざまなテーマで研修会を開催し、会員同士の交流を深めています。しかし、協会には課題もあります。

「現在の会員数は 19 名、あくまで川崎協会の会員数です。動ける会員が 5 人いるかどうかというところで、メンバーはだいぶ高齢化してきました。どこの当事者会もそうだと思いますが、若い人はなかなか入りませんね」

若い世代の参加が少ない背景について、北島さんはこう分析します。

「最近はいろんな情報に即座にアクセスができるからなのでしょうね。私が 18 歳で事故に遭った頃は病院での情報が主で、障害当事者の会等に入会しないと情報が入らなかったんですけど、最近はインターネットで調べたり SNS で当事者同士で繋がれば、情報を簡単に得られますから。きっと、私と同じ障害のある方が市内にいるのですが、会ったことがない方も多いのだらうと思います」

しかし、直接の交流には代えがたい価値があると北島さんは指摘します。

「直接会ってみて分かることもあると思うんです。それに、そういう当事者の会に入っていて繋がりがあると、例えば令和 6 年に発生した能登半島地震の時も、脊髄損傷者連合会の石川支部があるので、そこにうちの支部長が連絡を取って状況を聞いたり、会員の安否の確認もできます。そういう非常時のことも含めて多くの人と関わりを持つことは大切だと思うから、やっぱり会に入ってきてほしいなと思います」

◆暮らしの中の課題

北島さんは、日常生活で直面する問題についても指摘しました。

「出先で車を止めようと思ったら車いす用の駐車スペースに一般の車が停まっていて使用できません。障害者専用の駐車スペースは、車椅子の乗り降りに必要な広さが確保されているため、私たちには欠かせない場所なんです。でも、健常者の方が『ちょっとの時間だから』と気軽に停めてしまうことが日常茶飯事です。専用スペースの必要性を理解していただけないのが残念です」

「バリアフリー化が進んでも、日常生活の中で小さなトラブルが発生することがあります。これらは一見些細なことですが、私たち車いす利用者の生活に大きな影響を与えます。例えば、歩道にはみ出したゴミで通行できず、危険な車道を使わざるを得ないことがあります。犬のフンや路上に吐かれた痰は、車いすのタイヤを通じて家の中まで持ち込まれる可能性があります。これらの問題は、皆さんのちょっとした心遣いで解決できます。公共の場でのモラルを守っていただだけで、私たちの生活は大きく改善されるのです」



（研修会の様子 右手前 2 人目が北島さん）

◆理解を広げるために

障害者に対する社会の見方について、北島さんは率直に思いを語りました。

「障害者だからという目で見られるのは今でも嫌だし、『かわいそうね』と言われたりするのは非常に辛いものがあります。また、行政での手続きや店舗での買い物の際にも、私ではなく付き添いに説明をする場面が多くあって、『私に話してください』と訴えることがあります。人権を無視されているようでとても腹立たしく思います」

このような経験から、北島さんは福祉教育の重要性を実感し、小学生向けの福祉教室で講演を行っています。

「小学 4 年生程度を対象にした福祉教室で話をする機会があります。そこでは、もし障害のある人や車いすの人がエレベーターに乗ろうとしていたら、先に行ってボタンを押してドアを開けておくことや、自動ドアでない場合にドアを開けてくれるなど、簡単な手助けがどれほど私たちの助けになるかを伝えています」

また、大人向けの啓発活動の重要性についても北島さんは言及しました。

「大人の方々の中には恥ずかしさから手を貸すことをためらう方もいるようです。そのため、親世代の方々に向けた講演会など、私たちの声を直接届ける機会があればいいかと考えています」

◆小さな気遣いの大切さ

最後に、北島さんはこれまでの 40 年を振り返りながら、こう締めくくりました。

「家族や福祉・介護関係の皆さん、友人たちの存在はもちろん大きな支えですが、多くの方の小さな気遣いが、私たちの生活をより豊かにすることを理解していただければ幸いです」

3 回にわたる連載を通じて、北島さんの 40 年の軌跡をお伝えしてきました。その歩みの中には、確かな変化と変わらぬ課題がありました。しかし、一つ一つの出会いと支え合いが、より良い社会への確かな一歩となっていることも感じられます。北島さんの言葉が私たちに投げかけているのは、誰もが自分らしく生きられる社会は、私たち一人一人の小さな気づきと行動から始まるということなのかもしれません。

（取材：坂本（編集委員）・安藤

文・構成：安藤）

第 28 回「全難聴福祉大会 in 平和の都ひろしま」に参加して

令和 6 年 11 月 23 日(土・祝)～25 日(月)に全日本難聴者・中途失聴者団体連合会(全難聴)や全国要約筆記問題研究会(全要研)、福祉関係者など 430 人が参加して、第 28 回「全難聴福祉大会」が広島市で開催されました。

◆大会第 1 日目は 13:00～16:00 まで分科会です。第 1 分科会は「難聴とフレイル」(補聴器・人工内耳部)。第 2 分科会は「コロナ禍で何が変わったか」(要約筆記部)。第 3 分科会は「制定 50 周年!! 耳マークの過去・現在・未来」(耳マーク部)。第 4 分科会は「平和について学ぼう」(平和の都ひろしま実行委員会)など、今回は 4 つの分科会で行われました。

わたしは、申込通り第 1 希望の「第 2 分科会」に参加しました。会場は JMS アステールプラザ 2 階の多目的スタジオでした。参加者 128 人で、4 つの分科会のうち「第 2 分科会」は参加者が一番多かった。テーマ:「コロナ禍で何が変わったか」(～遠隔要約筆記利用の事例～)。司会は全難聴要約筆記部の江連紀子氏。座長は全難聴要約筆記副部長の藤谷弘晃氏。パネリストは全難聴要約筆記部長の宇田川芳江氏、全要研理事長の長尾康子氏、全要研前理事長の山岡千恵子氏の 3 人。それぞれ最初に自己紹介があり、その後、宇田川芳江氏から「コロナ禍が要約筆記利用に及ぼした影響について」話された。コロナ禍で対面での集まりが不可能になったが、派遣事業体の 6 割が遠隔要約筆記を利用していない。機器が使えない、Wi-Fi 環境がない等の要因はあるが、遠隔要約筆記で在宅のまま会議が出来たことや権利擁護として、何処にいても同じレベルの通訳が受けられる。コロナ禍での経験を、今後に生かそうと話していた。続いて長尾康子氏より「コロナ禍における全要研の取り組みと課題」について発表された。緊急事態宣言前後の取り組みとして、Zoom 利用のマニュアル化や OBS(仮想カメラ)利用マニユア

ルを公開、ICT を利用した要約筆記事業のプロジェクトも立ち上げたが遠隔要約筆記の実施は広がっていないとのこと。次に、山岡千恵子氏より名古屋市の要約筆記者の立場で「遠隔要約筆記の現状と今後」について話された。名古屋市では、いち早く政府へ遠隔要約筆記利用の要望を出した。全国で一番早く遠隔要約筆記の体制を整え、2021 年 4 月 1 日から派遣を開始。組織作りや従事者の研修も行ってきた。最後に、それぞれのパネリストの話を司会が整理し、経験を今後に繋げられると良いと結論づけた。

◆大会第 2 日目は 9:30～15:00 記念式典や記念講演、アトラクションが行われた。記念式典は実行委員長の挨拶から始まり、来賓者は 21 名。記念講演は厚生労働省障害福祉部企画課自立支援室室長補佐の吉元信治氏。アトラクションは、広島神楽「八岐大蛇」(羽佐竹神楽団)の披露で、昭和 54 年に広島県無形民俗文化財に指定されているそうだ。

◆大会第 3 日目は、参加希望者のみ一泊二日で宮島観光(世界遺産)コースをバス 2 台で楽しんだそうですが、わたしは地元協会の仕事があり残念ながら不参加でした。

(NPO 法人川崎市中途失聴・難聴者協会

伊藤 實)

編集後記

3月に20年以上お世話になったドクターが退職されるとのこと。お疲れさまです、と言いたいところだが、後進がないため新しい病院を探さねばならず呆然……。でも友人に相談したところ情報提供してくれる方々がおり無事に決着しました。人との繋がりがって本当に大切だなと改めて実感しました。

(編集委員 平田 美保)

発行人 神奈川県障害者定期刊行物協会
〒222-0035 横浜市港北区烏山町 1752 番地
障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール 3F
横浜市車椅子の会内 (頒価 100 円)